

学位被授与者氏名	溝部 聖貴（みぞべ まさき）
論文題目	門司港と近代日本の発展 ——門司港・若松・小倉を結んだ石炭とその港湾ネットワーク——
論文審査結果の要旨	本論文の意義は稲吉晃が政治学の立場から示した近代海港の開発モデルに修正を迫った点にある。 明治国家にとって富国強兵を進めるため海港整備は至上課題であった。ただ、その建設にあたっては資本も技術も欠如しているため、中央国家の統制は不可欠であった。一方、統制といっても国家機構が近代化するなかで、議会設置、官僚制の整備によって関係するアクターが増加し、選挙権の拡大で市民の政治参加も拡大する。港湾建設のステイクホルダーは多元化、増大したのである。この状況を日本全国の海港のかたちを眺望しながら海港建設モデルを示したのが、稲吉の研究であった。 これに対して、本論文は稲吉の研究が中央国家の統制を好意的に評価している点を批判し、門司港の発展の前提になったのは、すでに江戸期から開発が進んでいた鉱山と河川整備にあったことを指摘する。近世からの経済発展が明治期以降の開発の前提になっていたと説くのである。また、ここでは地元の民間人の貢献が重要であったとして、その貢献が明治期以降の発展でも無視できないものであったと指摘する。 こうした民間活力を重視する姿勢から、本論文の著者は高付加価値生産を重視するポストモダン経済への対応も考察し、港がそれぞれに持つ強みを活かしながら協働して発展の道を探るネットワーク型の開発を訴えることになるのである。 こうした視角から門司港の建設と発展を見直した本論文は、確かにきわめて斬新な主張を展開している。ただ、その主張を説得的なものにするには、第一に、明治国家の政官の力に対抗する地元民間の力、そして北九州地域に存在する各港の相互依存について、統計資料等を用いてより詳細に示す必要がある。 第二に、国際ハブ港、ネットワーク型の開発についての理論的な説明が求められる。物流の実態を考えると、インターナショナル、ナショナル、リージョナルと三層に分けることができ、これにネットワークがどうかかわるかの考察が求められる。 したがって、第三に実証においても横浜の開発について立ちいった検討をすべきである。また、近隣港が協働する形態は北九州地域以外にも存在しているので、いわゆる工業地帯に散在する港に言及すべきであろう。 なお、文献表記での誤りも散見された。 以上の点で改善が望まれるものの、考察の枠組み、研究史の整理、実証のそれぞれが一定の水準に達しており、論文として評価できるものになっている。 2026年 2 月 13 日に、北九州市立大学北方 キャンパス 3号館 3-329 教室において、審査委員全員出席のもとで最終試験を実施して学力を確認し、論文の説明を受け、質疑応答ののちに、全員一致で当該論文が修士（国際学）として十分な内容であると判定した。